



鎌養だより

(校長室より 第10号)

令和2年2月10日

鎌倉養護学校 校長 齋木 信也



今年は記録的な暖冬になるようです。雪が積もらず営業のできないスキー場の映像が連日テレビに流れていたかと思うと、一月下旬からは新型コロナウイルスへの脅威と警戒がにわかに沸き上がってきました。

テレビニュースの解説などを見てもコメントする医師や専門家によって警戒感にも温度差があり、このウイルスの捉え方も様々です。

学校では、日ごろから感染予防や防疫対策に取り組んでいることもあり、先生方や保護者の皆様の向き合い方もとても冷静で、感謝しているところです。かつてデング熱に対する脅威が流布されたときには、教員や保護者の方から安全性や予防対策に関する問い合わせなどが随分あったように記憶しています。

さて、暖冬とはいえ、冬は今が寒さのピーク。例年、この時節には大雪警報が発令され、実際に何度か休校の判断をしたこともありました。幸い、インフルエンザの流行という点では、児童生徒の発症報告が少なく、大雪のことも含めて、このまま学期末を迎えたいと願っているところです。

1月は、30日(木)に第4回学校評議員会議を開催し、保護者の皆様にご協力いただいた学校アンケート評価の集計結果をもとに今年度の学校目標の達成状況について報告させていただきました。ありがとうございました。皆様には別途報告させていただきます。

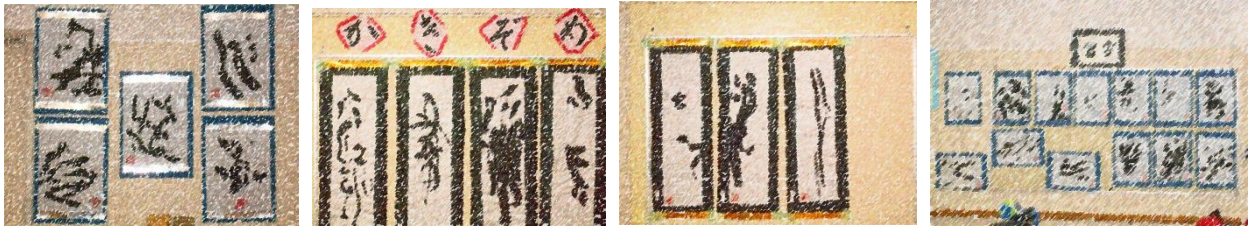
1. 児童生徒の活動から 1月は書初め



校舎というのは子どもたちのいない冬休みの間にすっかり凍てついて、1月の始業式前の教室や廊下や職員室は氷が張るくらい冷たくなってしまいます。そんな冷凍庫のような校内に子どもたちの息吹が吹き込まれるのが、半紙に踊る児童生徒の意気込みや願いです。

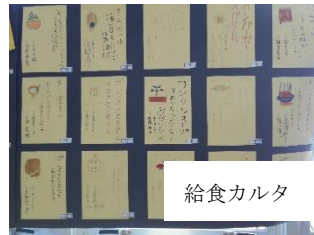


高Bの生徒が自分の漢字をひとつ選んで元気よく筆を揮ってくれています。こんな一年であってほしいという飾らない一文字が一人ひとりの個性たっぷりに表現されています。肢体部門のみんなの書体は、こちらますます筆使いに磨きかけられ、芸術の域に達しているのではと目を奪われる出来栄の作品ぞろい。凍てつく廊下に足を運ぶ勇気と元気をもらいました。



1月の教育活動から

小さき花の園



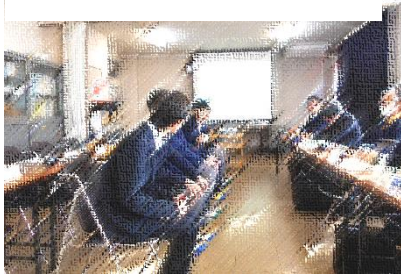
在宅訪問の様子



本校の皆さんにはなかなかご紹介できない施設訪問と在宅訪問の様子です。左は施設訪問の「小さき花の園」の三学期の始業式の風景。小さきの職員さんから子どもたちの冬休み中の様子について報告してもらっているところです。右の2枚は在宅の二名の高等部生徒が本校とハングアウトを使って同時授業をしている風景です。今はまだご家庭のWiFiを使わせていただいています。こうした遠隔授業の充実は本校の教育活動にとってなくてはならないものになりました。環境整備と普及が急務です。

3. 第4回学校評議員会議より(評議員の皆様からのコメント)

生徒会役員と評議員の懇談風景



＜江上氏＞鎌養の子どもたちのことをもっと地域の方々に知ってもらおう。関小の支援ボランティアさんに活躍してもらおう。

＜蓑島氏＞面談した生徒たちはしっかりと受け答えができていて素晴らしい。卒業後の課題はコミュニケーションと自分の居場所づくり。

＜太田氏＞生徒会の皆さんとの面談がとても楽しかった。地域とつながる窓口づくりが大事。

＜齋藤氏＞呼吸器の子どもの卒業後を地域としてどう関わっていくか。学校から社会へ、発達障害系の生徒のフォローが課題。

＜山田氏＞卒業後の働き方、暮らし方は重要。卒業前に保護者も教員も学校と社会との環境ギャップを認識し準備しておきたい。

保護者の皆様からのアンケート回収率がアップ。ありがとうございました。分析の結果は後日配付いたします。



毎月の鎌養だよりに短歌をのせる

アンケート回収率 (H30/R1)

